

### Ⅲ Paul Takagi カリフォルニア大学 (UCB) 副教授 (米国) のアポイントメント・プログラム招請について

法学部教授 菊田 幸一

被招請者 Paul Takagi 副教授は季刊雑誌 Crime and Social Justice, London, MacMillan の編集代表者として知られており、とくにアメリカにおけるラジカル・クリミノロジー (革新的犯罪学) の提唱者としてひろく知られている。このたびの来日は同氏が二世でありながら始めての来日となったこともあり、わが明治大学を拠点とした同氏の来日は、犯罪学の分野に多大の影響を与える成果をあげたと確信している。

1) 来日翌日の5月10日(木)午後6時30分より8時30分の2時間にわたり主として大学院生および学外の犯罪学専攻研究者のための研究会を開いた。テーマは、「犯罪学研究における調査のあり方」であった。この研究会においては最近のアメリカの犯罪の動向について統計を示しながら分析説明を試みたうえ、在米日系人の犯罪が極度に少ないこと、その想定される理由、少数民族と犯罪の関係および統計扱いにおける諸問題について研究討議した。

出席者 13名 (本学大学院生8名, 学外者3名)。

2) 5月16日(水)午後6~8時。第2回目の講演会開く (本学大学院第二会議室)。テーマ: アメリカ合衆国における受刑者と人種差別。

当講演会は、Paul氏を招請してもっとも本格的な公開の講演会であり、本学国際交流委員会の主催ならびに犯罪学研究会の共催において開催した。

同氏は、アメリカにおける拘置所収容者のスライド (約65枚) について逐一説明を加える方法で、こんにちアメリカで直面している受刑者と社会の諸問題について熱弁をふるった。

出席者 約65名 本学関係者に加えて、かつてアメリカにおいて同氏と知己となった研究者をはじめ矯正局職員、警察関係、大学関係者など多

数がおしかけ会議室は満席となった。

本学における2回にわたる研究・講演会はいずれも有意義なものであったが、同氏は、この機会を利用し、東京第二弁護士会および近畿大学において同じく講演会を開き5月31日離日した。

なお、同氏には多数の著書・論文があるが代表的なもの2点を挙げておく。

- ・「釈放前過程における受刑者の役割」

(The Role of the Inmate in the Pre-Release Process", Probation and Parole, N Y. John Wiley, 1970

- ・「近代矯正における行政と専門職との衝突」(Administrative and Professional Conflicts in Modern Corrections", of Criminal Law and Criminology, 64. 3, 1973

- ・「人種・犯罪と社会政策」

(Race, Crime and Social Policy, J. of Crime and Delinquency, January 1980

なお、同教授の来日を機会に、これまでに同氏が発表した主たる論文のうち、わが国においても関心のある数編を選んだうえ翻訳作業をすすめる計画を同氏の承諾をえて実行することとなった。そのうえは翻訳書として出発の予定である。